

21 世紀にキリストを生きる

「声なき者の友」の輪 柳沢 美登里 「祈りの通信」

第16号 (2016年7月)

<主の声に耳を澄まして：フクシマ原発事故5周年、チェルノブイリ30周年、そして世界で・・・>

<人類の生存がかかる世界の今に気づかされる>

7月初め、バングラデシュの首都ダッカで外国人の集まりを標的にした痛ましいテロ事件が起きた。バングラデシュ社会が急激な転換期を迎えている一つの表れかもしれない。3月の訪問で、私に示されたのが、この「急激に転換する社会」だった。日本に留学経験があるバングラデシュの一人の事業家が、近年、収益性の高い事業の一つはエレベーターの輸入だと語った。日本製は高価なので中国製を輸入している。なぜ、繁盛しているのか。バングラデシュの女性一人当たりの子ども数は2013年に2.2人にまで減少する一方、人口はこの四半世紀で60%増加し、1億6千万人に達した。さらに2010年以降、バングラデシュの経済成長率は毎年6%を越えている。これによる急激な

中間層人口増を受けて、都市の高層建築許可基準が変わり、ダッカでは20階建ても許可されるようになったという。どこもマンション建設ラッシュだ。中高層マンションにエレベーターは必需品。これがエレベーター輸入繁盛のからくりだ。「でも待って。バングラデシュでは停電が当たり前。しょっちゅう、エレベーターに閉じ込められるんじゃない？」

まさに、バングラデシュのエネルギー需要は待たなした。ある日、壁にかかる銀行のカレンダーで見覚えがある建造物が目に留まった。「この形はどこかで…」脇の説明を読み、愕然とした。それは2015年末にロシアの技術と資金援助を最終合意し、農村での建設が始まった原子力発電所が6年後の2022年に運転を始めた「夢の姿」だったのだ。先日もバングラデシュは、北東インドの州から電気買い付けの契約を交わしたと伝えられた。マンション購入が可能な中間

層増大への対応に追われているのだ。

同じように、20世紀に発展途上国といわれてきた国々で、経済成長が進み、先進国の大衆が享受してきた電気がもたらす「近代生活」を手に入れる人たちが増えている。素晴らしい達成だ。よく考えると、世界中で「近代社会」を持続させるため

世界中で「近代社会」を持続させるための工業化と人々の「近代生活」を維持するために莫大なエネルギーが必要

の工業化と人々の「近代生活」を維持するために莫大なエネルギーが必要になったことに気づかされる。

地球温暖化による重大な影響の一つに海面上昇がある。その影響を真っ先に受けるバングラデシュは、温暖化をもたらさないエネルギー確保と人々が「電気による近代生活の恵み」を享受することの両立が待たなし、という21世紀のチャレンジの真っ只中にある。

2015年12月、パリで世界197か国の代表が参加し、気候変動への対応を協議するCOP21が開催された。包括的宣教を推進するローザンヌ運動の一部門「ローザンヌ被造物ケ



アネットワーク」の顔として、一度も稼働しない原発を有するフィリピンのテンドロ師はこう声明を読み上げた。「炭素排出削減という決断は、人命は守られ、育まれるべきものであるという倫理上の根拠に根差している。化石燃料由来のエネルギーから再生可能エネルギーへの転換はまさに、科学への挑戦のみならず、人類全体の長期の生存と幸福を追究する倫理上の行動なのだ。」と。主に従う者たちが、この方の声に耳を澄まし、人類のために立ち上がり行動する時が来ていることを思う。

<フクシマ：「近代」を駆け抜けた私たちへの語りかけ>

国で最初の原発運転を6年後に控えたバングラデシュから戻って数日後に原発事故5周年を迎えた福島県を訪問。この5年間、「声なき者の友」の輪に協力し、何度も福島訪問を共にしてくれたバングラデシュ以来の友人、韓国人のスファンと今回も一緒だ。

90年代初め、国民多数が一日一食も満足に取れない貧困に喘いでいたバングラデシュでは、スラムや農村の貧しい家庭は電気の光とは無縁だった。なけなしのお金で買った灯油ランプで夜を迎え、早々に眠るのだった。90年代に、私はこの「前近代」生活をバングラデシュで過ごしたおかげで、日本の「電化された近代生活」を少し、意識することができるようになった。洗濯機、テレビや冷蔵庫がない生活。冷蔵庫なしでは日持ちしな

い生鮮食料品を毎日、買いに行かなければならないことを発見した。日々の突然の停電には、停電が想定内の生活パターンを編み出す必要があった。

2011年、福島原発事故によって、「先進国」とは安価で確実に供給される電気で、便利で快適な生活が家の中、さらには街中に広がっていることが当たり前になっている社会だったと判った。40数年間、次々に造られた原発も、便利な社会を「当たり前」にすることに大きく貢献していた。40年近く前、核分裂エネルギーは100%制御可能と言えるのかと危惧したが、時が経つと、原発は無味無臭?!で害のないものに無意識の内に押し込まれ、無関心になっていった。原発事故前には、安価で温暖化にあまり貢献しない原発をエネルギー供給の国策の要に据えることも致し方ないという気分さえなっていた。

とても遅まきながら人生50年生きて、福島原発事故によってやっと私が生き20世紀後半から21世紀の「近代社会」を可能にしたのはエネルギーだったと心底、理解した。21世紀世界では、すべての国で電気エネルギーは必須になった。どのように生産・輸入するかは国の最重要テーマだ。200か国にもなった世界各国間の資源と技術も含めたエネルギーの分配は、第二次世界大戦前の世界とは比較にならないほどの重大事項であり、エネルギーを巡って世界を巻き込むような紛争が、どこで起こっ

てもおかしくない時代であると思わされる。

この5年間、福島訪問を通してエネルギーや電気のイロハに無知であったことを肌で感じ続けた。これほど空気のような存在になったものの生産過程や危険性に目を留め続けることは、とても難しいことを思わされた。そして、人生は生涯かけて学び続け、自身が変わり続けるものだが、その学びのなんと遅い者であるかを痛感させられた。

毎年、訪問する韓国人の友スファンは、福島の人々にとって住み慣れた地域の放射能汚染という現実と時間の経過の中で、人々がどのように感じ、考え、応答するのかについて関心を寄せ続けた。それを聖書の神様の視点で見極めようと祈り、彼女に与えられた言葉と映像によって、世界の人々と共有するために5年間、英語のブログを発信し続けてくれた。

<http://fearnotfukushima.blogspot.com/>

今年3月、私たちが南相馬市原町地区を訪問したのは主イエスの復活を祝う日曜日だった。



その朝、スファンと七色に空を染めながら暗闇をかき消して現

れた太陽を見て、宇宙を造り、この太陽の光も造られた神は、私たちの苦難も喜びもすべての営みを見つめてくださっていること、イエス様が私たちの想像を超える新しい体に甦られ、「どん底の失望で決して終わらせない、希望の源」のお方であるとしみじみと感じたのだった。

解決の時期が見通せない放射能汚染や廃炉の課題は、世界の人々と共有し学び続けるべき重要課題だ。日々の暮らしの場が人類の課題になった福島に暮らす人々の声は、未来の人々に伝えられ、人類の歴史に残されるべきものだ。現代の私たちには今まで気づけなかったことを教えてくれる。それは、現代世界に語っておられる主の声に耳を澄ます大切なときだった。その時間を共有しようと訪問し続ける韓国人スファンの決断。主の深遠な思いへの応答を思う。

＜チェルノブイリ原発事故30周年のウクライナで、主の声に耳を澄ます＞

人類史上初の重大原発事故を経験し、4月26日に30周年を迎えたウクライナを今年4月、「声なき者の友」の輪として訪問した。スファンが2012年、重大原発事故の体験者に橋渡しをしてくれたのだ。この年の3月、「声なき者の友」の輪では、ウクライナからボリス氏を福島に招き、若者たちと話を聞く機会を持った。20代後半の時、チェルノブイリから100キロ離れたキエフで放射能に遭遇し、体調不良を経験していた。ボリス

氏の26年後の振り返りで最も印象深かった言葉は「最悪の事態だったけれども、これをきっかけに私が変わられ、わずか5年でソ連からウクライナという独立国へと社会も大きく変わっていった」ということだった。人間的に見れば誰も経験したくない最悪の事態だ。そこから意味を見出すことは不可能に見える。けれども、人類初の最悪の事態を若い時に通った彼からの分かち合いは、深く考えさせるものだった。

ボリス氏はユダヤ人の家系に育ち、当時のソ連の合理的な教育を受けた無神論者だった。その彼が歴史を導く神がおられ、今も生きて働いておられることを体験するようになったのだ。

ウクライナでは廃炉にあと100年かかるとも言われるチェルノブイリの原発を来年、新しい石棺で密封するところまでこぎつける一方、2年前には新しい火種が勃発した。ウクライナにヨーロッパ寄りの政権が擁立されたことに危機感を抱いたロシアが、一方的にクリミア半島併合、東部では親ロシア派を焚き付けて内戦を起こし、2015年の停戦合意も不確かという憂慮する事態が続いているのだ。

原発事故30周年の前日、私たちはキエフに設立されたチェルノブイリ事故博物館に出かけた。その日、多くの小学生から高校生までの子どもたちが博物館を訪問していた。30年前には生まれていなかった子たちだ。彼らの両親も幼かったか10代だった



だろう。博物館で、社会を変える過去の重大事故を学びにやってきた次世代を見ながら、30年という月日を思った。30年後、50年後、100年後を歩む後の世代に何を伝えていくのか。今の時代に立たされた世代の責任を思わされた。

私たちは、過去に先達の世代が犯したことや自らの世代が起こした問題や失敗を変える、あるいは無かったことにすることはできない。だとしたら、私たちができる最大の貢献は、その事態を私たちの社会が許した事象として、決定権のある個人やグループの判断、社会システム、その社会動向を追認した民衆の傾向などを多角的に研究し、その学びからの教訓を後世に残すことではないかと思えた。研究ではないが、聖書には過去の個人、世代、社会の失敗事例が数多く記され、そこに働かれた憐みの神様のご介入の歴史を目にし続ける。そう考えると、神様は失敗自体を嫌うのではなく、失敗やごまかしを隠し、そこから教訓をくみ取ろうとしない頑なさや驕りを最も残念に思っておられると思えてくる。個人でも社会でも、失敗や起こした問題

から次の世代に伝えるべき教訓を神の視点というレンズを通してくみ取る。失敗しない神の民でなく、民としての失敗を認め、そこから学び続ける神の民であってほしい、また、神が造られた民としてすべての民にそのように歩んでほしいという意図をもって、神は現在のように聖書を記述させ、編纂させられたのではないかと思えてくる。

今回の訪問で、チェルノブイリ原発事故から30年をボリス氏に振り返ってもらった。

「自分にとって、かけがえのない魂の旅路の30年」という言葉が返ってきた。「神を信じない者から信じる者に変えられたことは『自分と社会を見る見方』が180度ひっくり返るものだった。以来、それは深め続けられている」と。ボリス氏は個人的な魂の成長体験と同時に、社会の変容も見守り、関わり続けている。「チェルノブイリ原発事故は地域や21年前に独立したウクライナにとって大きな出来事だ。同時に30年の間、歴史は進んできた。今、ウクライナが直面する課題は、汚職、ロシアが干渉する内戦、麻薬中毒者や失

業、中小企業経営の困難などの社会問題と多岐にわたっている。問題は山積み。けれども、その問題の中に神が働いてくださることを信じる時、問題さえも神による恵みの機会なのだという希望が湧いてくる」と総括する。最近、今まで神の方には見向きもしなかった人々が政府・官僚の汚職にうんざりして人ではなく、垂直方向を見上げ、真理を見出そうとし始めていると語った。

原発事故から8年後にボリス氏が始めるように導かれたイエスの体では、麻薬中毒で魂がボロボロになった多くの若者たちの全人的回復に家族ぐるみで関わるメンバーたちが起こされていた。また、現在の内戦で負傷し医療費を満足に払えない人々をサポートしている。

個人としても、社会としても神の導きを体験する30年で、自分たちがおかれた国内状況でも、そればかりか国を越えてロシアとヨーロッパの中間に位置するウクライナからの役割を見据え、今のときを見きわめて、近隣の様々な国々の「主イエスの体」と共に民族間の和解を進める連携を、今、深めていた。

問題の中に神が働いてくださることを信じると、問題さえも神による恵みの機会なのだという希望が湧いてくる

歴史を導いておられる神という長い目で見ると視点が養われるにつれて、目の前の出来事だけに囚われることから解放され、すべてを見ておられる神様の視点に近くなるのかと思わされる。それこそ、聖書に導かれたイスラエルの民、ユダヤ人に与えら

れた賜物なのかもしれない。

激動の世界で主の声に耳を澄ますとき、私たちが置かれた場で、「神の国」に近づく未来に

向けて、今、託されている大切なことが見えてくることを思う。

<お祈りください>

■ 原発事故を経験した福島とウクライナの方々が、深い憐みと愛を持って導かれ、共にいてくださるお方を味わい、特別の体験を人類に分ち合う貴い器として歩めますように。主からの格別の祝福がありますように。

福島、ウクライナ、バングラデシュ、そして日本で様々な課題に直面している人々の友となり、そこで働いておられる神を見上げようと労しておられる皆さまと共に歩めることを、心から主に感謝しつつ。

2016年7月28日

柳沢 美登里

「声なき者の友の輪・Friends with the voiceless International (FVI)」の働きのために、お祈り、ご支援をよろしく願いいたします。活動報告は随時、ホームページ <http://www.karashi.net> でご覧いただけます。「柳沢支援」は右記へお願いいたします。郵便振替：名称 FVI 口座番号 00180-0-300201